

## 岩手県内で行われている鳥類標識調査の紹介 および盛岡市雫石川河川敷における標識調査結果

伊達功<sup>1</sup>・西岡裕介<sup>1</sup>・青山一郎<sup>1,2</sup>・久慈敏<sup>2</sup>・松下敬行<sup>2</sup>・水戸里樹<sup>2</sup>・坂口斉<sup>2</sup>・  
作山宗樹<sup>1</sup>・由井正敏<sup>3</sup>・鈴木祥悟<sup>4</sup>・中村充博<sup>4</sup>・関川實<sup>5</sup>・千葉一彦<sup>2</sup>・佐藤文男<sup>6</sup>

<sup>1</sup>：日本野鳥の会盛岡支部、<sup>2</sup>：岩手大学野鳥の会 OB、<sup>3</sup>：岩手県立大学総合政策学部、  
<sup>4</sup>：(独)森林総合研究所東北支所、<sup>5</sup>：日本野鳥の会宮古支部、<sup>6</sup>：(財)山階鳥類研究所

### 【岩手県内で行われている鳥類標識調査】

岩手県は都道府県では北海道に次ぐ面積を有するが、東北地方の他の県同様、鳥類標識調査が継続して行われている所は少ない。現在調査が行われているのは、秋の渡りの時期に、内陸部の2箇所（盛岡市下厨川の(独)森林総合研究所東北支所構内、盛岡市下太田の雫石川河川敷）と、太平洋に面する沿岸部の2箇所（宮古市八木沢、釜石市片岸町の鶴住居川河口）である。繁殖期には内陸部の2箇所（玉山村姫神および滝沢村柳沢の各鳥獣試験地）と沿岸部の2箇所（宮古市日出島、釜石市三貫島）で行われている。

このうち、玉山村と滝沢村の各鳥獣試験地では、(独)森林総合研究所による研究（鳥類群集の保護と森林施業）の一環として調査が行われている。日出島と三貫島ではウミツバメ類の営巣地保全研究の一環として、(財)山階鳥類研究所の佐藤らによって調査が行われている。このうち三貫島は2004年から環境省のモニタリング1000対象地となった。

内陸中央部～南部、および沿岸北部では全く調査は行われておらず、調査に携わる人材の確保と調査地点の設営が現在の課題である。

今回の発表では、これらの調査地で行われている調査の様子について紹介する。

### 【盛岡市雫石川河川敷における標識調査結果】

雫石川河川敷の調査地は、盛岡市内を流れる3河川（北上川とその支流の雫石川、中津川）合流点に近い、JR盛岡駅対岸にあたる右岸側に設営されている。環境は周囲を農地に囲まれた、面積およそ9ha（幅約50m、長さ約1800m）のヨシ原および河畔林である。

県内陸部でまとまった面積を持つヨシ原は少なく、主に北上川とその支流河川沿いに散在して見られる程度である。3河川とも、河畔の緑地がおおよそ連続しており、鳥類の移動ルートとなっていると考えられる。北上川沿いで最も上流側に位置するヨシ原となる雫石川河川敷は鳥類の渡りの重要な中継地として機能していると考えられる。

標識調査は1974～1975年に(財)山階鳥類研究所が、ツバメ類のねぐら調査を8月に行ったことを皮切りに始められた。その後、秋の渡り時期に地元在住のバンダー（主に岩手大学野鳥の会の有志）によって調査が開始され、2004年現在に至るまで、毎年継続して行われている。

発表では、放鳥種構成の変遷を中心に、これまでの調査結果について紹介する予定である。